

〔研究ノート〕

絵画をめぐる蘇州文人の友情—文徴明と王寵

15、6世紀明時代を代表する文人画家・文徴明(1470～1559)は、90年に及ぶ生涯の大半を故郷の蘇州で過ごしました。蘇州文人サークルの中心として、蘇州内外の文人墨客、官僚達と交友し、その中から数多くの詩書画を生み出しました。本稿では、友人の一人である王寵(1494～1533)に焦点をあて、彼との交流の中で生まれた絵画を考察します。

王寵は今日、明を代表する書家として知られ、「草書宋之間詩卷」(嘉靖8年(1529)、東京国立博物館、図1<部分>)などの作が伝わります。文徴明より23歳年下で、正徳3年(1508)、蘇州・南濠の商人であった父親のからいで、兄の王守とともに文徴明に字(王寵は履仁、王守は履約)を授けられました。以後、文徴明と王寵は長く金蘭の交わりを結び、雅会の記念(例えば「恵山茶会図巻」正徳13年(1518)、北京故宫博物院)や科挙受験の激励(例えば「停雲館言別図」嘉靖10年(1531)、ドイツ・ヴェノッティコレクション)といった文脈の中で、様々な絵画が生み出されました。

文徴明の画業において、王寵がきわめて重要な役割を果たしたことは既に指摘されてきました。それは文徴明が、彼との交流の中で少なからず画をなしたばかりでなく、それらの多くが、文徴明の画業でも優品に位置づけられるものばかりだからです。特に文徴明が官吏を辞職して北京から蘇州に帰郷し、本格的な書画活動を始める1530年前後には、完成までに4年の歳月をかけた「松壑飛泉図」(嘉靖10年(1531)、図2)、5年をかけた「関山積雪図巻」(同11年(1532)、図3<部分>)といった労作を、王寵との交流の中で制作しています。

これらの作品が描かれた時期と遠くない嘉靖11年(1532)、文徴明は「石湖清勝図巻」(上海博物館、図4)

という作品を制作しています。紙本淡彩の作で、画面には蘇州西南の名勝・石湖の茫洋たる水景と、淡緑色の湖畔の連山などを描いています。款記には「壬辰七月既望徴明写石湖清勝(壬辰の年7月16日、徴明、石湖の清勝なるを写す)」とのみあり、制作背景については一切記されていません。筆者は本図の制作にも、少なからず王寵が関わっていたのではないかと考えます。理由の一つとして、この石湖が王寵の住まいでもあったからです。

王寵は、師の蔡羽のもと太湖洞庭西山に三年学び、正徳8年(1513)頃から石湖に移り住みました。兄の王守によれば、王寵は元々身体が弱く、蘇州城内の喧騒を避け、近くの景勝地である石湖を居としたようです。王寵を訪れることが一つの契機となったでしょう、石湖は文徴明を始めとする16世紀蘇州文人たちの雅会の地として多に愛され、嘉靖元年(1522)には湖畔の治平寺内に、王寵を堂主とするサロン「石湖草堂」が築かれるなど、文人雅集の地として新たに整備されてゆくののです。

また文徴明は、本図を描く12年前にも石湖の景を描いています。「石湖花遊曲詩画巻」(図5<画巻>)は、正徳9年(1514)の書巻に同15年(1520)、画巻を補ったもので、王守のために制作されたものでしたが、もとは王兄弟ともう一人の友人・湯珍との石湖をめぐる交友が機縁となっ

ています。王寵は当然、本作のことも知っていたと考えられます。文徴明は、かつて描いた石湖図に関わった人物である王寵に、新しく制作した石湖図「石湖清勝図巻」を見せたものと思います。

そして「石湖清勝図巻」の制作された時期は、王寵が病床にあった頃でもありました。王寵は、嘉靖9年(1530)頃から体調を崩し、亡くなる同12年(1533)まで詠まれる詩文は多くが病中の作になります。文徴明が「石湖清勝図巻」を描いた同日に、王寵は潘妻の祖父・潘敘のために「半巖潘君七秩序」を書していますが、それには「病中数承珍貺、感感。…(病中にしばしば珍しい贈り物を承り、ありがたく思う)」と、潘敘の親族にあてた書簡を附しており、これを書く前にも、体調の優れない時期が続いていたことが窺われます。

「石湖清勝図巻」を制作する少し前の7月初、文徴明は蔣山卿、王庭とともに、王寵を見舞いに石湖を訪れているようです。〔蔣大参子雲、文内翰徴仲、王祠部直夫過訪山中作〕王寵『雅宜山人集』巻六〕しかし、画作を通して心を通わせてきた両者だからこそできる激励を、文徴明は考えてはいなかったでしょうか。王寵の勧めで描き始め、完成を伸ばしていた「松壑飛泉図」と「関山積雪図巻」を、あえてこの時期に完成させたことは、病中の王寵を慰める思いもあったからと考えられます。王寵は完成した「松壑飛泉図」に賞賛の言を述べてくれたと、文徴明は本図の跋に記しています。〔於是有以見履吉之賞音也。〕またこれまで述べてきたように「石湖清勝図巻」は、王寵を鑑賞者として想定していたと考えられます。画中の

石湖は実景をそのまま写すというよりも、数多くの文人雅集が行われてきた地として清浄なイメージで理想化されています。王寵の住まう地であり、彼等蘇州文人にとって思い出深い石湖を文人の聖地として描くことは、王寵へのこの上ない励ましでもあったのではないのでしょうか。

本図制作の同年から王寵は、静養のために虞山の白雀寺と石湖を往復していましたが、翌年の4月30日に、40歳の生涯を終えました。王寵の墓誌銘を記した文徴明は、その中で「嗚呼悲哉、王君已矣、不可作矣(ああ悲しい、王寵がもうこれまでだなどと、起ってはいけないうことだ)」と吐露します。文徴明の他の墓誌銘には見られない、感情を露わにした哀悼の言です。推敲された文面よりも、かえってその深い悲しみが伝わります。

「石湖清勝図巻」を制作して25年後の嘉靖36年(1557)、文徴明は本図に書跋を附しました。内容は、自身が過去に詠んだ石湖にまつわる詩文九首で、このうち二首が、王寵を含める友人達と石湖で遊んだ際に詠まれたものです。本巻はこの頃には張鳳翼が所持し、その後鳳翼の願いで、更に蘇州文人達の跋が附されました。その中には文徴明の息子たち、文彭と文嘉による跋(嘉靖38年(1559))もあり、両者はいずれも、嘉靖5年(1526)、王寵と共に詠んだ和韻詩「石湖八絶句」を書いています。これは彼等にとって本図が、王寵との当時の交友を強く想起させるものだったからに他ならないでしょう。王寵は生きて本巻に跋を附すことはできませんでしたが、友人達の想いのもと、雅会の記憶は巻中に留められることになったのです。(都甲さやか)

※図1、2、3は『世界美術大全集 東洋編8 明』(小学館、1999年)から複写し、図4、5は上海博物館より提供いただきました。

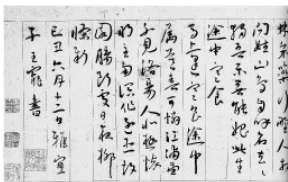


図1



図2



図3



図4



図5

季刊 美のたより No.202

平成30年 4月 13日

発行 大和文華館